

ウェブと書物をめぐる断想

亀山郁夫

私たちの人生が「時間」という枷にしばられるかぎり、たとえば中世の城のように、どんなに遠目の美しさをほこる図書館といえども、けっして希望のシンボルたりえない。いや、むしろ、そこに収められた書物たちの運命を思うとき、その城は、たちまちのうちに絶望のシンボルへと変質しかねない。

周知のとおり、こうしたペシミズムを日々加速させているのが、グローバル化である。日頃、携帯電話とコンピュータの画面に釘付けにされた私たちの目が、林立する書架を、侮蔑的に見下ろす日が確実に訪れてくるだろう。そんな懸念を抱かせるほど、書物は、恐ろしくアナクロニスティックな地位に身を落としてしまった。スピードが至上とみなされる時代、縦横十数センチの書物が読み手に求める時間は途方もなく、非効率的であることこの上ない。だから、私たちは、勢い、ウェブ上の手軽な情報入手に走りがちである。

確かに、そこでは驚くべき冒険が可能である。グーグルでもヤフーでもよい。縦七ミリ、横一〇センチの検索窓を通して、それこそ世界の果てまで、いや、人類の巨大な無意識の世界へと入りこめる。そして時に、奇跡というしかない詩的メタファ（library）の二つの単語を窓に放り込めば、一〇〇分の一秒の速さで、九三〇〇万の「メタファー」の誕生に立ち合える。詩

人マラルメが夢見た「世界という書物」の実現――。

では、「現実の」書物は、もはや死に体なのか。フロアに林立する書架と、書架に背を向けノートパソコンに向かいあう人間の姿は、たんに、敗者と勝者の残酷なコントラストでしかないのか。周知のように、図書館の利用は、カタログという道標ぬきには不可能だし、どんなに手馴れた利用者でも、カタログからお目当ての本とストレートに遭遇できる確率はさほど高くない。その点、ウェブの検索エンジンは無類の強みをもつ。

しかし、ここに落とし穴がある。ウェブ空間が、しばしばコマーシャルイズムと悪意に汚染された空間でもあるということだ。とくに悪意は、恣意でゆがめられた情報は、恐ろしい。その意味で、いまや一〇〇億ページといわれる電脳図書館も、情報の総量とその質、モラルの面で、町の図書館一つ分に及ばない。

そこで新たに求められるのが、検索エンジンの威力を図書館の潜在的な能力に結びつける高度な能力の開発ということになる。いかに貶められたとはいえ、書物そして図書館は、固有名をもつ人々の高い批評意識によって選別された情報空間なのだから。「希望のシンボル」としての図書館を築くため、日々行われている蒐集の作業に思いを馳せるとき、私たちはきっと、これまでとは別の目で、林立する書架の前に立つことができるだろう。

（かめやま いくお／東京外国語大学長）